ウィリアム・モリスの女性観
―その未来社会観と衣装の改革運動を通して―

木　村　竜　太

はじめに

社会主義者としてのウィリアム・モリス（William Morris, 1834-96）は、その来たるべき社会における自由と平等の達成への訴えを主著『ユートピアだより』（*News from Nowhere; or, an Epoch of Rest: Being Some Chapters from a Utopian Romance*［*Commonweal* 誌において 1890 年に連載］）において描き出していく。しかし、たとえば、そこに描かれる女性との関わりにおいて時に批判されることもあった。もちろん、モリスは両性間の平等をもその思想に組み込みつつ、ユートピア世界を描いていったのであるが、そのユートピアの有り様に男性性が見られるというのである。

またこの『ユートピアだより』においては女性論だけではなく、その両性間の関係性の描写にも興味深い点が見られる。恋愛、結婚観についてモリスは『ユートピアだより』の中で特に一章をもうけて語るだけではなく、その物語の端々に主人公たるゲストの視点やゲストとこの物語における重要人物としてのエレンとの関係性、あるいはゲストを案内してくれるディックとクララの関係性等を通して描いていく。そしてまたモリスの描くユートピアにおいてこの恋愛に関する事項は暴力的な事件を引き起こす原因ともなるのである。

こうした女性観や両性間の関係性についてどのように考えるべきなのだろうか。モリスがそのユートピア論において述べたことは、彼がユートピアについて語った言葉として度々引用される言葉だが、「ユートピアを読む唯一の安全な方法はそれをその作者の気質の表現であると見なすこ

とだ」[*1]ということであり、その論に従うならば、暴力的な事件についてはともかくとしてその女性観やゲストの視点を見る時、それは男性としてのモリスの表現だとも読むこともできるだろう。しかし、ユートピアが理想のヴィジョンを描く以上はそういうものとして過ぎ去っていくことはできない。

モリスのこの女性観、両性間の関係性の描写はモリスの描く未来社会、モリスの全体的な思想を考える上でも重要なことであろう。本稿では、モリスの未来社会におけるそうしたものの現れ方を見ていくにあたって、モリスの講演、あるいは『ユートピアだより』は当然のことではあるが、さらに同時代において女性の衣装の改革についての論も盛んに行われていたことをも見据えつつ考察を進めたい[*2]。

第一章　モリスの女性論、あるいは両性間の関係性を巡って

先にも述べたように、またアディ・ミネオもその考察の中で述べているが、モリスの、特に『ユートピアだより』に描かれる女性観に関しては時に批判的に見られることもあった。女性の状況、性的役割や愛のあり方について進歩的視点を持っているけれども、「それにも関わらず女性のアイデンティティやその社会的役割に関しては伝統的な家父長的価値観から自身を引き離すことができなかった」というモリスに対する見方があると

---

*1　May Morris (ed.), *William Morris : Artist, Writer, Socialist*, Oxford, 1936, vol.2, p.502.

*2　『ユートピアだより』における衣装の表象に関しては拙論「ユートピアと衣装—ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』—」(『文化史学』第七十三号、2017年、103-24頁）において論じた。そこにおいては、『ユートピアだより』で華やかに描写される衣装の表象の意義を考察するべく、モリス自身の衣装や社会主義団体に属する以前のモリスの衣装論も取り上げつつ、そこで論じられる「変化のための変化」を避けること、衣装の希望として「選択の自由」を持ち続けることの必要性、それによる「理に適った」ものとしての衣装の有り様の訴えに注目しながら、ユートピアにおける衣装について論じた。本稿では、そのことをも踏まえつつ、特にモリスの女性観を、そして両性間の関係性についても、同時代における衣服改革論にも言及しながら論じていく。

いうのである[*3]。その象徴的なものとしては、『ユートピアだより』において来たるべき世界で目覚めたゲストがゲストハウスにて朝食を食べる場面があげられるだろう。そこでは織工のロバートが声をかけると、女性が食卓の準備を始めるのである[*4]。また女性が家事をすることについて、ゲストがこの世界のことをよく知るハモンド老人と未来社会の様相について語り合う場面において、ハモンド老人は女性の解放を語りつつも、ゲストの、男性に対し女性が給仕することは反動的ではないのかという問いに対し、男性が家事をすることで騒動が起こってしまうノルウェーの古い民話について語り、また「賢い女性にとって、巧みに家のことをやりくりすること、すべての同居人たちが喜び、彼女に感謝するようにそうすることは、大きな喜び」ではないかと答えるのである[*5]。

モリスは家事については 1894 年のインタビューにおいても語っているが、それによると、社会主義社会では女性が男性と経済的に同等の地位を占めるであろうということなどを語り、また「女性がすべての法的な無力から解放される」ことを見たいと述べつつ、しかし、両性には違いがあるとする。モリスは、ここでは両性の有り様の差を述べているということであり、「女性が男性に劣っている」ということではないし、実際に劣っていないという。女性は男性と同様多様な能力を持ち、女性に向く、女性がよりよくできる様々な仕事もあるのだとする。そして女性が家事だけに向いているということではないとしながらも、女性と家事を結びつける。ここでも『ユートピアだより』同様、家事を評価し、それは「最も難しく、重要な研究の価値あるもののひとつ」であるというのである[*6]。

---

*3　Ady Mineo, "Eros Unbound: Sexual Identities in *News from Nowhere*", *The Journal of the William Morris Society*, vol.IX, no.4, Spring 1992, pp.9-10.

*4　May Morris (ed.), *The Collected Works of William Morris*, New York, 1966, vol.16, p.15（以下*Works*と表記。『ユートピアだより』の訳に関しては川端康雄訳『ユートピアだより』岩波文庫、2013年を適宜参照した）.

*5　*Works*, vol.16, p.60.

*6　"'A Living Wage for Women', by Sarah A. Tooley, *The Woman's Signal*, 19th April 1894, pp.260-1", Tony Pinkney (ed.), *We Met Morris: Interviews with William Morris, 1885-96*, Reading, 2005, pp.89-95. だが、アディ・ミネオによれば、モリスは『ユートピアだより』を著す前年の講演（How shall we live then?）において

『ユートピアだより』においてはエレンが自由闊達に行動し、ゲストと交わり、議論することに象徴的に見られるように、モリスの目的は、ジョン・ベラミー・フォスターが指摘するとおり、「本質的な平等の理想を示すものとしての男女間の条件の平等」を描くことであったと言えるだろうし[*7]、また、アディ・ミネオの述べるように、モリスは「男らしさと女らしさという固定化された二項対立を脱構築」するような社会を描いたとも言えるだろう[*8]。ただ、他方でジャン・マーシュが述べるように、それは「理想郷の男性的ヴィジョン」だとの言及もなされることになろう[*9]。

両性間の関係性についても平等というだけではなく考えておくべきことがある。キャロル・シルバーは「モリスは同時代の因習的な習慣もヴィクトリア朝の幾人かのフェミニストの信念にある禁欲的な傾向」も否認するとし、またこの世界は「ひとびとの性的なエネルギーを解放」するのだという[*10]。ジャン・マーシュは先に記したように『ユートピアだより』に男性的な視点を見出しているが、その指摘の先にこの物語に流れるロマンスやエロティックなものをも見ている。ゲストは出会う女性に対して、時に彼女たちがディックの方を彼よりも好むのではないかという思いを抱いたりもする。またゲストとエレンとの関係性にもロマンス、最終的には報われることのなかった愛情関係が見られるのである。さらにジャン・マーシュは、ディックがクララに対して、干し草刈りに行けばあなたを毎晩疲れてベッドに行くようにさせるだろう、その時にはあなたの首や手は日

「男性が家事にすすんで参加しない限り、女性は真に自由であることはできないと明確に宣言している」（Ady Mineo, "Beyond the Law of the Father: The 'New Woman' in *News from Nowhere*", Peter Faulkner and Peter Preston［eds.］, *William Morris: Centenary Essays*, Exeter, 1999, p.205）。

*7 John Bellamy Foster, "William Morris's Romantic Revolutionary Ideal: Nature, Labour and Gender in *News from Nowhere*", *The Journal of William Morris Studies*, vol.XXII, No.2, 2017 (Special Issue: Morris and revolution), p.31.

*8 Ady Mineo, "Beyond the Law of the Father: The 'New Woman' in *News from Nowhere*", p.205.

*9 Jan Marsh, "Concerning Love: *News from Nowhere* and Gender", Stephen Coleman and Paddy O'Sullivan（eds.）, *William Morris & News From Nowhere: A Vision for Our Time*, Totnes, 1990, p.121.

*10 Carole Silver, *The Romance of William Morris*, Ohio, 1982, p.151.

に焼け、そしてガウンの下はイボタノキのように白く、とても美しく見えるだろうと述べ、それに対してクララがうれしさから赤くなるという場面に、「最もおおっぴらにエロティック」な描写を見出している*11。このようにロマンス、エロティックな視点というものが『ユートピアだより』には存在し、そうしたことがこの世界のひとつの世界観をつくりあげているのである。

また両性の関係性という点では、『ユートピアだより』では、他のひとを愛したと考え、ディックから去ってしまったクララが再度ディックのところへと帰ってくる、そしまた結婚するだろうという描写があり、男性と女性との間は一夫一婦制のようだが、自由に結婚し、別れ、そして帰って来るというように、女性のクララが主体的に行動しているとも見えるように、ヴィクトリア朝のものとは異なる関係性を築きあげていると言える。この世界では結婚は財産が絡むものではなく、ひとの情熱や感情によって成り立っているのであり、「調和が存在しなくなっているのに、調和があるかのようにかこつける必要」はないのである*12。両性間の関係性は、ヴィクトリア朝の制約から解放されて自由を手に入れているのである。

衣装と女性に関して言えば、ワンダ・キャンベルは、『ユートピアだより』での衣装の有り様を論じる中で、ヴィクトリア朝では女性は「衣装における慣習の抑圧的な力の最も明瞭な犠牲者」であるという。来たるべき世界においては、そうした性的な対象としての地位においてしまうような衣装の有り様、男性の財産であるかのような立場にしてしまうようなことはなくなっているとする。しかし、それは性の否定を意味するものではないとし、『ユートピアだより』におけるエロティシズムについても示唆する*13。ワンダ・キャンベルも引用しているように、マイケル・ホルツマンはエレンの軽装は美的な意味合いと、そしてエロティックな理由があるの

---

*11 Jan Marsh, op.cit., pp.122-4.

*12 *Works*, vol.16, pp.55-8.

*13 Wanda Campbell, "Clothes from Nowhere: Costume as Social Symbol in the Work of William Morris", David Latham (ed.), *Writing on the Image: Reading William Morris*, Toronto, 2007, p.110.

ではないかという[*14]。そして、ワンダ・キャンベルはこの新しい世界では官能的感覚は強められているとし、両性ともに美しく着飾り、お互いを恥じることなく称賛することを指摘する[*15]。

女性の有り様については時に批判的な見方をされることがあるにせよ女性が主体的に行動する未来社会を描いたこと、そこに関わる女性観、両性間の関係性、こうしたことはモリスの未来社会そのものを考える上でも興味深いものであり、様々に議論されてきたし、されるべきことであろう。それらの議論も参照しつつ、モリスの未来社会のひとの有り様についての考えにも言及し、モリスにおける女性観、両性の関係性を再考察していくこととするが、こうしたことを考えるに当たっては当然同時代にはいかなる論があったのかについても見なければならない。モリス個人の語る論、それがモリス個人の中でどのような意味を持ったのかということを問う必要性もさることながら、こうした議論がモリス個人においてと同様、社会全体の中ではどういうものであって、どこへ向かうのかを見ていく必要がある。このことは未来社会全体の構想を含めてのモリスの思想をより幅広く考察することにもつながっていくだろう。そこで、まずはそのことをモリスの視点とともに、同時代の衣装の改革という論点を取り入れつつ論じていく。モリスと同時代における衣装の、特に女性の衣装に関する議論は、後に見ていくように、女性の立場への視点、美的、健康等の意見を含めて衣装を様々に論じつつ、その改革運動を生み出した。この同時代の衣装の改革についての論も見ることで、そしてそこからもモリスの女性観、両性間の関係性についての論を見ていくことで、そうしたものの同時代における位置やモリス思想における意味や意義を考察していきたい。

第二章　女性、両性間の関係、そして来たるべき社会

キャロル・シルバーは、この世界のひとびとが男性も女性も「健康的な官能」を楽しむことができるのだとするが、しかし、その一方で挫折させ

*14 Michael Holzman, "The Pleasures of William Morris's Twenty-Second Century", *The Journal of Pre-Raphaelite Studies*, Vol.4, No.1, 1983, p.34.
*15 Wanda Campbell, op.cit., p.111.

られた情熱が時に問題をももたらすことを見て、「フェローシップにおける融合にもかかわらず、この世界のひとびとは必ずしもエロスと折り合いを付けることができてはいない」とも述べている。このことは『ユートピアだより』の登場人物であるディックが恋愛関係の事件によって男性二人と女性一人が亡くなったという出来事に言及しつつ、「愛とは非常に合理的なものではない」と語っているように、『ユートピアだより』の世界のひとびとにも認識されていることなのである[*16]。

先述したようにモリスはユートピアを個人の気質の表現と見なしたが、キャロル・シルバーは、それを捉えて、『ユートピアだより』の世界をモリスの本質を見いだせるものとし、この物語をモリスの重要な個人的経験を「マルクス主義的な未来のヴィジョン」に融合したものであり、類のないものであると述べ、「おそらくはそれは文学史の中で唯一の自伝的なマルクス主義ユートピア・ロマンス」なのだという[*17]。そもそもこの物語で描かれるテムズ川を遡る旅はモリス自身が経験した旅を基にしているのであろうが[*18]、そうしたかつての経験をもさらに美しく昇華させることでモリスは来たるべき世界の有り様を描くのである。だからこそ、モリスのこうした個人的かつ社会主義的ユートピアとしての世界に描かれている様々な事象を見ることも、モリス個人という存在の有り様と社会的な広がりを持つ存在としてのモリスの考察へとつながるという意味で興味深いことなのであろうし、モリス思想を考えるにあたって何度でもこの物語へと帰る価値があるのである。

『ユートピアだより』は個人的なものでありつつ社会主義的ヴィジョンなのでもあるが、しかし、この個人の夢を超えてのヴィジョンではすべてが完璧にまとまっているわけではない。よく言われるように、『ユートピアだより』の副題が示すように、ここに描かれるのは「休息の一時代」のことであり、さらに長大なユートピア・ロマンスの中の幾章であるという

---

*16　Carole Silver, *op.cit.*, pp.151-2及び*Works*, vol.16, p.35.
*17　Carole Silver, *op.cit.*, p.141及びpp.146-7.
*18　川端康雄訳『ユートピアだより』の訳者解説、464頁参照のこと。

形で描かれているのであり、その前後にはさらなる物語、世界が紡がれていかねばならないのである。その世界は革命や変化を経て行き着いたのであり、その先にもまた変化があり得るのである。そして、ここにおいて単純には解決され得ない問題として語られるものが男性と女性との関係性、恋愛である。かつての多くの暴力的な犯罪の原因でもあった私有財産の廃絶されたこの世界では暴力的な事件も皆無ではないが少なくなっていき、刑法も存在しない社会の形成へと至るのであるが[*19]、恋愛はこの暴力的な事件を引き起こす原因ともなり得るものとして描かれる。たとえば、『ユートピアだより』の第六章では先述したように恋愛を巡って男性二人と女性一人が亡くなってしまうという事件について触れられているし、また第二十四章においても一人の女性を巡っての問題が正当防衛のような形で一人の男性の殺害へと至ってしまうという出来事が描かれている。

ジャン・マーシュも指摘するように、ここに描かれる恋愛のあり方において、クララが去りまた戻ってくるように、二人の男性が一人の女性を巡って一人が死ぬように、これらの例ではどちらかと言えば、女性よりも男性の側が犠牲となり、あるいは受け身の存在として描かれている。この世界において、女性はすでに経済的な依存等からも解放されている以上、より弱者であるとして表現されることはなく、男性に対して愛情の力、性的な力を行使し得る存在ともなり得る[*20]。たとえそれがモリスという男性の視点から描かれたとしても、この世界は男女間の平等を意識して描かれており、恋愛も女性であろうと男性であろうと自由に楽しむことができるのである。

この物語においては女性もそのような愛情の力を行使する存在として描かれている。これはフェローシップが達成され、ひとびとがその中で平等に暮らす社会におけるひとの解放、女性の解放とも言えるだろう。このことを象徴する重要な存在と言えるのはすでに指摘されているようにエレンであろう。エレンはこの世界でも特別な存在としてゲストとの深い関

---

*19 『ユートピアだより』第十二章を参照のこと。

*20 Jan Marsh, op.cit., p.118.

係性を描かれることとなるが、女性として、というよりも一人の人間として自由に振る舞う。それはモリスの理想とする、革命後、フェローシップの下でひとが自由であることを当たり前のものとしている社会そのものの象徴である。

モリスはその未来社会論（The Society of the Future, 1887）で、未来社会観はそれぞれのひとによって個々に異なるとしながら、未来社会について望むことを語るが、そこで次のように述べている。モリスの理想としては、「まず第一に自由と個人の意思の洗練」が達成されることである。そして、「他の人間にではなく、人工のシステムに奴隷のように依存していることを取り除くことで人間的な悩みや責任」を負うことができるという。そのためには「自由な拘束されることのない人間にとっての本能的な生」が必要なのだという。モリスにとって、「恋をすることや陽気なこと、食欲や眠気をもよおすことにわずかなりとも不名誉を感じることがあったなら、我々は不完全な動物であり、それゆえ哀れな人間である」というのである。そうした理想社会では、「社会的な結びつきは習慣的に、そして本能的に感じられており、決まった形でそのことを常に主張する必要もないだろう・・・そのような社会の喜びは健康な動物としての人間の感覚や情熱の自由な行使の上に成り立つだろう」という。ただし、それは「共同体の他者を傷つけることなく、社会的結束に反したりすることのない限り」においてである。またそこでは誰もが「人間らしさを恥じる」こともなく、「その正当な発展」だけを望むのである。こうした健康的な自由から「知的な発展の喜び」も生じるとする。そして、そこにおける芸術は、「直接に感覚に訴えかける」ものとなるだろうとも述べている[*21]。ここでモリスは人間の動物的生というものの存在や感覚が重要であることを訴えている。個人としても社会としても自由を勝ち取り、拘束されることのない人間は、本能的な生を享受し、感覚を行使し得るのだ。もちろん、それは社会的な結びつきというものの中でこそ発揮され得るのである。モリスはここにおい

*21　May Morris（ed.）, *William Morris: Artist, Writer, Socialist*, vol.2, p.457及び pp.465-7.

て、システムではなく、ひとへの視点というものをはっきりと打ち出していることが見て取れるだろう。

こうしたモリスの論からすれば、モリスが恋愛やエロティシズムを社会的に抑圧されることのない個々の人間の生の自然な発露として描いていることの意味も見て取れよう。モリスにとっては、愛情関係やエロティシズムという生に関わるものの行使は「社会の喜び」の基礎となるものなのであり、その抑圧は哀れな人間をつくると言えるだろう。しかし、こうした時に非合理なものでもある愛情の自由な行使が許されているとしても、『ユートピアだより』の世界は非合理的なひとが暮らす非合理的な社会として描かれているわけではない。ゲストはこの世界のひとびとを「道理をわきまえている」と見えると評しているし[*22]、ハモンド老人もまたこの世界で物事の処理がいかになされているのかについて語る際に、この世界の「道理をわきまえたひとびとの間では」あらかじめ問題について話し合いがされているだろうからモートと呼ばれる集会の場での提案が誰にも賛同を得ることなく終わることはないはずだと述べる[*23]。さらにハモンド老人は「社会の唯一の合理的な状態は純粋なコミュニズム」だと表現し、そのような世界を今実際にゲストは見ているのだとする[*24]。

こうした道理をわきまえたひとびとの暮らす合理的な状態としての社会においてこそ愛情も、人間の感覚も自由に行使し得るのである。だが、モリスは、愛情等を時として非合理なものであると認め、気持ちを永遠には続かないものとも認め、それによる殺人さえこの世界にあって起こり得ることを認めている。道理をわきまえた人間の、しかし合理的だとは割り切れない感情の働きとしての愛情を経済的に、あるいは法制度で抑圧したり、また社会的システムで取り繕うことをしないことこそが、モリスのこの世界をつくりあげることになるのである。

---

*22 *Works*, vol.16, p45.
*23 *Ibid.*, p.88.
*24 *Ibid.*, p.104. 先に愛とは「合理的な」ものではないと訳したもの、またこの段落で「道理をわきまえている」、「道理をわきまえた」、「合理的な」と訳したものは「reasonable」である。

第三章　女性への視点、そして衣装の改革と来たるべき社会と

ワンダ・キャンベルも指摘したように、ヴィクトリア朝の女性の衣装には性的な対象としての状態へとしてしまうような要素があるとされる[*25]。よく言われるように、ヴィクトリア朝期には性を忌避するという規範が存在しており、たとえば、「一九世紀は脚を女性が露わすことは滑稽なだけではなく、許されざるスキャンダラスな振舞い」であり、「なんとしても避けねば」ならなかったという[*26]。またバーナード・ルドフスキーは、「コルセットをしていない女性にはどことなく放縦のにおいがした。そしてコルセットのひもでしめていないウェストは罪の器とみなされていた」とし、コルセットの着用を「美徳」と結びつくものとするのである[*27]。

他方で、今やこの時代はそのような性の抑圧の時代だという「一元的な見方」では見通すことができないともされる[*28]。そして、こうした衣装の規範も逆に性への刺激を生み出すという。スティーヴン・カーンはこの時期の「極端な慎み」の最たる例として「女性の脚の隠蔽」をあげるが、その「脚を隠す運動は非常に効いたので、十九世紀中頃になると、女のくるぶしがチラリと見えただけで、男たちは容易に刺激された。この時代に、靴やストッキングを初めとして盲目的崇拝（フェティッシュ）の対象物が広範囲に及んでいるということは、さらに、女性の下半身を隠すことによって誇張されたエロティシズムが生じることをも立証するものである」と述べる[*29]。ここに

---

*25　Wanda Campbell, op.cit., p.110.

*26　能澤慧子『モードの社会史　西洋近代服の誕生と展開』有斐閣、1991年、201頁。

*27　バーナード・ルドフスキー、加藤秀俊、多田道太郎訳『みっともない人体』鹿島出版会、1979年、139-40頁。ただし、戸矢理衣奈はコルセットによるタイト・レイシングに「女性独自の価値観によって展開された美容戦争の一環として理解できる一面がある」とし、女性の主体的な側面もあったことを指摘している（『下着の誕生　ヴィクトリア朝の社会史』講談社、2000年、65頁）。

*28　田中孝信「横溢するセクシュアリティ」田中孝信、要田圭治、原田範行編『セクシュアリティとヴィクトリア朝文化』彩流社、2016年、10頁。ヴィクトリア朝においてはそうした性の抑圧だけで済ますことのできない、「性の言説が横溢する時代の様相」も見いだせるのである（同論文、11頁）。

*29　スティーヴン・カーン、喜多迅鷹、喜多元子訳『肉体の文化史　―体構造と宿

はヴィクトリア朝の性への価値観が見えるが、本能的な生の有り様にも人間の解放を見たモリスはこうした性の二重の有り様からの真の解放をも目指したのではなかろうか。だからこそモリスのその未来社会においては愛情、両性間の関係性とそれを示す行為やエロティシズムの自由な有り様、両性が共にそれらを自由に行使し楽しむ姿が描かれるのであろう[*30]。

このモリスが『ユートピアだより』を描いた時期、あるいは講演、論考において衣装に関しての考察を述べた時期はイギリスにおいて衣装の改良、改革についての議論が起こっており、健康や美しい服を巡って合理的な衣装を求める運動が存在していた。そして 1881 年の合理服協会（The Rational Dress Society）をはじめ、衣装の改革の問題を探る協会がつくられるのである。こうした組織には他に合理服会（The Rational Dress Association, 1883）、合理服連盟（The Rational Dress League, 1898）とともに、衣装の審美的な側面に主に関心を持った健康・芸術的衣服同盟（The Healthy and Artistic Dress Union, 1890）といったものがあげられよう[*31]。美的な衣装の改革への刺激、影響を与えた存在としてはジョン・ラスキン、そしてラファエル前派やモリス等があげられるし、また合理服協会にはオスカー・ワイルドが参加しており、健康・芸術的衣服同盟には G.F.ワッツやヘンリー・ホリデーといった芸術家などモリスとも関わりのあったと言

命』法政大学出版局、1989年、16頁。

*30　たとえば、それは、先述した日焼けの肌について言及するディックとクララの会話、ゲストがテムズ川を遡っての旅に出る前にアニーという女性が親しげにキスをしてくれた際に、「小旅行をしたいという希望がほとんどなくなってしまった。しかし、諦めなければ。というのもそのような快い女性には彼女の年齢にふさわしい恋人がいないわけはないということは明らかだったので」（*Works*, vol.16, p.143）と思う場面、さらにはエレンの顔も手も素足も日に焼けた、軽装の姿（*Ibid.*, p.148）、彼女の愛撫のように感じられる声（*Ibid.*, p.189）、エレンがゲストに言う「西の地方をずっとあなたとともに旅したい」（*Ibid.*, p.190）、あるいは「私たちと一緒に住むのはどうかしら」という言葉（*Ibid.*, p.197）、そうしたエレンという存在に感じる「興奮」（*Ibid.*, p.195）という描写等に見られるだろう。

*31　Patricia A. Cunningham, *Reforming Women's Fashion, 1850-1920, Politics, Health, and Art*, London, 2003, pp.65-6. 及び鈴木桜子「19世紀イギリスにおける改良服運動とその周辺」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要』2007年、Vol.6、3頁（各協会の名称の訳についても同論文を参照した）。

えるひとが関与しているという[*32]。モリスは 1882 年の講演（The Lesser Arts of Life）において、「選択の自由」の意識を持ち続けることとそれによる「理に適った（rational）、美しい衣装」を訴えているが[*33]、ここでモリスも理に適ったという言葉を使用している。またモリスとワイルドは 1881 年には出会っており、モリスは 「その人物に大いに関心を抱いたと見受けられる」という[*34]。

ワイルドが編集し、1887 年から発行された雑誌に『ウーマンズ・ワールド』（*The Woman's World*）誌というものがあるが、そこには「合理服協会の活動がたびたび紹介されている」。佐々井啓によれば、その雑誌において、「ワイルドをはじめとして、本誌に寄稿した人々は、女性の権利や自立のためには、まず衣服の改良が必要であり、女性の身体を締めつけたり、歪めたりする補助具を否定し、自然な形態のドレスを考案していくことが望まれるべきである」との主張をしたのだという。『ウーマンズ・ワールド』誌は急進的ではないにせよ、その編集方針は「女性の地位向上をめざし、さらに合理的な衣服を提唱する」ということであった。それは合理的なデザインのために「思想の合理性を持たなければならない」ということにつながるのだが、こうしたことは、「女性解放運動が、多くの場合、衣服改革を伴っていること」にも見て取れるという[*35]。

たとえば、合理服協会は「個人の趣味や便益」に照らして「健康や心地よさ、そして美しさ」を考慮した衣装を促進することを目的としていた。この協会はディバイデッド・スカートを打ち出していく。それについては様々に受け止められたようだが、その批判としては「道徳的に不可能」だ

---

*32　この点については、たとえば、Patricia A. Cunningham, *op.cit.*, "Chapter Four Artistic Dress in England: Visions of Beauty and Health"、及び鈴木桜子、前掲論文、及び佐々井啓『ヴィクトリアン・ダンディ　オスカー・ワイルドの服飾観と「新しい女」』「第1章　ワイルドの服飾観」勁草書房、2015年等を参照のこと。

*33　*Works*, vol.22, p.265. またこの「選択の自由」と「理に適った」衣装に関しては注2で示したように前掲拙論で論じたので参照されたい。

*34　川端康雄「ケルムスコット・ハウスのオスカー・ワイルド　―世紀末・社会主義・ロマンス―」『日本女子大学英米文学研究』47巻、2012年、129頁。

*35　佐々井啓、前掲書、58-9頁。

との評がなされている[*36]。さらに言うならソースタイン・ヴェブレンは「女性の衣服は、生産的な仕事とは無縁だと示すことにかけて、男性の衣服よりはるかにまさっている」とし、さらに労働に不向きであるだけではなく、「贅沢かつか弱く見える」という評判を女性に与えるものとしてコルセットをあげている。またハイヒール、スカートやコルセット等の「着心地のよさを無視するあらゆる小道具は、文明国の女性の服装に見られる顕著な特徴である。これらのものは、現代の文明化された生活様式において女はいまだに理論上は男に経済的に依存していること」を見せるとも述べている[*37]。

このような衣装に対する論や衣服改革運動を見てみると、衣装を改革することは、そこに関わったすべての人が当時の規範に異を唱えようとしていたわけではないにせよ、経済的なことを含めての女性の地位や性に関わる問題、当時の支配的な文化との関係性を問い直すことにもつながっていたと言えるだろう。その意味でこの時期、衣装を問題にすることは、社会性をもって存在していたのであり、先述したようにモリスに近いひともその運動に参加していた。鈴木桜子によれば、モリスと美的な改革を目指した健康・芸術的衣服同盟との直接的な関わりの証拠はないが、こうした改良服運動が始まった頃から、モリス等が「女性の衣服についても言及するように」なったのである[*38]。衣服改革の協会にモリスが直接・間接に関わっていたかどうかはともかく、このような衣服改革に関わる議論が同時代には、そしてモリスの周りには確かに存在し、モリスも衣装について論じているのである。

そのモリスが描いた物語は愛情やその関係性、エロティシズムとも言えるものがゲストの目を通して、登場人物の行動を通して、そしてエレンの軽装のような衣装を通して描かれるのである。この物語では、愛情は非合理的なものでもあるとして描かれるのであるが、それはひとの自然な姿で

*36 Patricia A. Cunningham, *op.cit.*, p.67.
*37 ソースタイン・ヴェブレン、村井章子訳『有閑階級の理論』ちくま学芸文庫、2016年、200-1頁、及び210頁。
*38 鈴木桜子、前掲論文、9頁。

あり、個々のひとびとのゆがめられてはいない人間性の有り様の発露なのでもあった。そしてまたこの世界では、ゲストにとって、すなわちモリスにとってもということになろうが、魅力的な女性、解放された豊かな世界の中で人間性の真に自然な有り様として生を楽しむことができる存在としての女性の衣装は、モリスの同時代の女性たちの「肘掛け椅子のように詰め物をした」ようなものではなく、どちらのものの模倣でもないのではあるが「古代の衣装と十四世紀のもののより簡素な形式の衣装との中間のようなもの」と表現されるものであり、「上品にひだのついた・・・」、「女性らしい」衣装であった[*39]。彼女たちの衣装は、この世界のひとびと、美しく、健康な女性が着るにふさわしい美しいものである。付け加えるならば、健康・芸術的衣服同盟が推奨するものは、「古代ギリシャ・ローマ時代の衣服を思い起こさせるような、肩から自然と流れ落ちるドレープ豊かな衣服だった。身体を束縛しない、自然の美しさを表現していく傾向は、ラファエル前派の絵画に描かれた衣服の表現に寄り添うものでもあった」というが、ここに理想とする衣装への意識についての影響なり共有を見出すこともできるかもしれない[*40]。ともかく、『ユートピアだより』におけるこうした衣装は、時にエロティシズムや女性への視点を象徴するものとしても現れつつも、「女性らしい」衣装という描写にモリスの視点が現れつつも、同時代の道徳的抑圧や社会的抑圧、経済的抑圧からも解放された世界、社会の唯一の合理的な状態としてのこの世界に生きるひと一人一人が選び、楽しむものとして存在するのである。

しかし、もちろんそれだけではない。この世界では愛情、その関係性やそこから生み出されるものも時に非合理なものとして事件を生むが、解放されたものとしてそれぞれのひとがその生を楽しむものとして存在して

---

*39　*Works*, vol.16, p.14. この点については前掲拙論においても指摘したが、モリスは先に言及した講演（The Lesser Arts of Life）においても、『ユートピアだより』での描写同様、「肘掛け椅子のように詰め物をしたようにではなく、女性らしく優美に覆う」ようにすべきだとしている（*Works*, vol.22, p.265）。

*40　鈴木桜子、前掲論文、6頁。

いるように、そこには感性に訴えかける部分が残されている。モリスの理想社会は、唯一の合理的な状態としてのコミュニズム社会であり、そこではひとびとは本能的な生を享受し、芸術は直接に感覚に訴えかけるものなのである。その社会で着られる衣装は理に適ったものとしてひとを経済や性の視点に従属させることのないものでありつつ、また感性と調和したものでもあるであろう。もちろん、それは、感性の単なる暴発ではなく、共同体、ひとびとの結束の上に成り立つものであり、またこの世界で「自由と個人の意思の洗練」を経験した道理をわきまえたひとの感性に訴えるものとしてのそれであるだろうが。この世界では、ゲストはひとびとが着ている服の形が「美しく合理的」であることを見て取るのであるし[*41]、またエレンは軽やかな衣装を好んで着ており[*42]、そして、これは男性の登場人物の例だが、豊かに、優雅な刺繍をつけた外衣をまとい、金の鎧を着たように見える清掃人はディケンズの小説にちなんで、そして派手な衣装を着て「中世の男爵のように金をたくさんつけている」からボフィンと呼ばれているのである[*43]。

この理想社会における解放されたひととしての女性は、この世界に生きるひととして道理をわきまえた存在でありつつ、また感性をも解放された女性は、もちろん同じく解放された男性も含めてだが、そのあり方にふさわしい衣装を着ているのである。十九世紀の世界では衣装は女性であることに伴う様々な要素から選ばされているものでもあったが、今や女性は自由であり、また愛情、それに伴うエロティックな力をも行使し得る存在となっているのであり、その衣装は真にひとの理に適ったものとして、そしてついに真に自己の感性、感覚を示すものとして、着られることになるのである。モリスの描くユートピア世界、それは、社会の合理的な状態の達成された世界、道理をわきまえたひとびとが暮らす社会的な結束が感じられる世界において、しかし、ひとの有り様、愛するもの、愛するということ、エロティックなものを時に非合理的に、「感覚的」に見出し、あるい

*41 *Works*, vol.16, p.139.
*42 *Ibid.*, p.148.
*43 *Ibid.*, pp.20-2.

はそういうひとの生み出す美、そういうひとの衣装を直接に感覚に、感性に訴えるものとしても受け入れ、受け止める力を持つと言えるだろう。

おわりに

モリスの未来社会観からすれば、人間性の解放、本能や感覚への意識に来たるべき世界における人間が真に自由であることの基礎があった。もちろん、それは示したように協調、社会的結束の上に成り立つ世界でのことではある。しかし、単なるシステム的なものではないものを考察してきたモリスにとって見れば、そうしたひとへの視点を色濃く持つユートピアの考察、描写はごく自然なことであったと思われる。そこに描かれる女性のあり方、両性間の関係性もまた、モリス個人の視点から描かれたものであることの内容を色濃く残してはいるとしても、しかし、そのようなひとのあり方を考察し、描き出したものと読み得るだろう。

モリスが同時代の衣服改革運動にどれほどの知識があったのか、そしてその関係性については更に問われなければならないが、確かにモリスが『ユートピアだより』を著した同時代には女性のあり方、健康な生、美的な議論、そして道徳ともつながるものとしての衣装を問う運動が存在していた。そしてそれは同時代の支配的な文化の有り様を問うことにもつながっている。その点ではヴィクトリア朝において衣服改革運動は社会的な意味合いを持っていた。こうした社会的な意味を持つ衣装という意識が同時代において、モリスにおいても存在していたと言えるであろう。『ユートピアだより』においては、モリスの描く衣装は、そうしたヴィクトリア朝の改革をさらに飛び越えて、社会全体が変革され、理想の世界に生まれ変わった後に着られるものであり、まさしくそのヴィクトリア朝の社会的意味からも解放されていくとも言えるだろう。

来たるべき世界でそうした衣装を着る女性は、「着せられる」のではなく自ら「着る」女性は、男性同様、生を楽しみ、解放された愛情や性を含む人間性を楽しみ得るのである。自らの感性を信じ、楽しむことができるのである。この世界において、道理をわきまえたひとびとは個人の感性を

信じ、発揮することができる。モリスは、その女性論や両性間の関係性を含むユートピア世界の描写において、そうした生そのもの、その生の発露としての個人の感性、それは非合理的な側面をも含むものなのであるが、それをも楽しむ生き方への訴えかけ、それをも享受できるひとの有り様の訴えを、社会の唯一の合理的な状態としての来たるべき世界観の上に描き出していくのである。